

『若夏』と『桜雲』の歌世界

柴田 佳美

言葉が気持ちに追いつかないと思うことがある。言いたいことを定型に収めたとしても、ゴタゴタとした歌では、言葉は気持ちから遠ざかってしまう。そんなときわたしは、影山一男の豊かな調べの歌を思う。

月読のしらべとともに渡りゆく鳥よさびし
き磔の鳥よ

影山 一男『若夏』

たとえば、右の歌である。月の光のなか渡る鳥を磔として見ている作者。月の光のなか飛ぶ鳥の景と音が響き合う。促音、撥音、拗音のない静かな歌である。静かさのあとに深々とした余韻が残る。(さびしき磔)は作者のさびしさを重ねているように想像できるもの、そうは書いていないので確かではない。このような歌に憧れる。

*

影山一男(一九五二)は、どのような表現をしてきたのかわかるか。本稿では、第四歌集『若夏』(二〇〇六)と第五歌集『桜雲』(二〇一一)から、いくつかの作品を挙げながら学ばたい。なお、『若夏』は四八歳後半から五三歳後半まで、『桜雲』は五三歳後半から五九歳前半までの作品である。

未来のややに見えきて四十代終りに近き頬

を叩けり

『若夏』

あとがきによると、『若夏』のころの五年間は、生活の上では比較的安定した時間であったと言う。第一歌集『天の葉脈』の間に御父君と御祖母君が逝去された。第二歌集『空には鳥語』の間には御母君が逝去されている。そうした時を経た作者の、未来についての歌である。

影山の年齢への思いは深い。(四十代終りにわれは頬を叩けり)とするよりも、文脈が引き締まり年齢に対する作者の感慨が伝わる。散文ではなかなかこのように表現しない。未来という大きな把握と下の句の頬の具体的なバランスも素晴らしいと感じた。

六坪の事務所の寒さ暖かさ傍においてよ震
へる子猫

『若夏』

第三歌集『空夜』の時代に校書房を立ち上げた作者。数詞を効かせた初句は歌を曖昧なイメージに留めない。口語を利かせ浮かびあがる、ひとりの男のやさしい横顔がいい。表現上の魅力のほか、われわれは影山の人間的な魅力にもふれることができる。

*

『若夏』と『桜雲』の歌を学ぶにあたり、それ以前の歌をほんの少しであるが見たい。

秋風の空渡りくる鳥の群れ 群れは孤独を包みて渡る 『空夜』

〔群れは孤独を包みて〕が印象的である。景の奥深くにある、作者が物思う気持ちに読者を引き込んでゆくような魅力を持つ。ふと、冒頭に挙げた歌と描写された事物が似ていることに気付く。〔孤独〕と〔磔〕では、〔孤独〕の方が言葉のはたらきとしてやや抽象度が高い。一方、〔磔〕は〔孤独〕に比べ読者がイメージをしやすく、歌の姿がはつきりとする。また、〔孤独〕の歌よりも〔磔〕の歌の方が名詞の数が控えられる、調べがより流麗であるように思う。そのような違いがあると感じた。

頬に肉すこしつきたる中年のわれゐる鏡に向きて、おはやう 『空には鳥語』

先に挙げた〔未来のややに見えきて…〕の歌と同様に、頬と年齢が題材である。描写が具体的に鮮明で、結句の展開がたのしい。年齢的な変化に対して、落ち着いて肯定しているように見える。先に挙げた頬の歌とはまた違う味わいの歌である。

影山の作品を読み返すと、推敲の段階で行われるであろう、韻律や言葉の取捨選択に少し変化があったような印象を受け

*

「コスモス」二〇〇七年十一月号の影山の選者小言の一部

引用しよう。推敲に対するこのころの考えが述べられている。自分が感じたことは自分だけのものである。それならば、自分の言葉を苦しくとも出来るかぎり探してゆくのが作歌の醍醐味だろう。そうやって手に入れた表現は、その人だけのものであり、またその表現が新たな発想につながってゆく。そのため的手段が推敲なのである。

〔自分が感じたことは自分だけのものである〕が心に残る。五十代の影山短歌の深化を支えるもののひとつがここにある。若くして豊かな韻律と美感を手に入れていた歌人影山の才は、天与のものに思える。しかし、持続的に言葉への情熱を持つ努力の人でもあるのだ。『若夏』『桜雲』を読み、わたしはその推敲の力を感じる。

*

見栄張るが江戸つ子氣質かたぎ悔しみをこらへて生きむ明日、明後日も 『若夏』

六本木ヒルズの夜の明るさにわが産土の神ところいかに坐す

二十年住みて五度目の浦安の三社祭は土地人のもの

エアコンの雫の狐雨が降る神保町裏道ひとりし行けば 『桜雲』

青山墓地遊び場として走りたりまだ死者たちを畏れざるころ

天の川銀に流るる空ありき麻布霞町昭和の夜空

東京はわれのまほろば涼風が身八口より匂ひ来たれば

壯たけなの期の三十年を働きて来し神保町母の匂ひす

浦安のそらに架かれる虹のあり妻と子に告げ飼猫に告ぐ

影山一男は一九五二年三月三日生まれ。生まれ育った麻布霞町は東京のご真ん中である。近年は長く千葉に住んでいるが、職場は東京である。千葉県浦安市に長く住みながらも、ときに土地の人になりきれない哀しみを抱くこともある。麻布霞町への愛が柔らかな呼吸で歌われている。

*

さて、このような作歌環境を考えると、地方での生活に比べれば植物が多いとは言えないだろう。しかし影山の歌にはしみじみと心に響く植物の歌がある。都会的な環境で作歌をする者にとって特に学ぶところが多い。

われと妻それぞれ生くる晩年の生を想へば
今日梅咲く 『若夏』

二十五の息子は恋に泣きしことありやあらずや夜の紫陽花

をみなごの腰回りほどの幹もちて山桃の木は夏の日をたつ 『桜雲』

ふうはりとこの世の外の風来れば目覚めゆ
くらし白梅の花

一首目、晩年に思いを馳せる作者、感情に流れすぎず梅の

花をしっかりと詠む。二首目、結句で紫陽花に視線を逸らすことで静かな感慨のにじむ作品となっている。三首目、山桃の木を歌いながら、漂うエロティズムが魅力的である。四首目、明らかに日常と少し違う世界を描いている。

実例として四首挙げたが、影山が詠んでいる植物は、さまざまな表情をみせている。

万葉のきよき乙女子あそぶがにスノウホワイトのつつじ群れ咲く 『若夏』

スノウホワイトという片仮名の名の花と万葉のきよき乙女子のバランスがおもしろい。影山作品のつつじの歌でわたしの好きな歌がある。

緋のつつじ白のつつじの曼陀羅に降る雨い
のちを濡らし降る雨 『空夜』

この詩的に構成された世界は印象的である。正直に言えば、わたしはこの曼陀羅の歌のような影山短歌の美的世界が大好きであった。『若夏』のつつじの歌は景の奥深くに降りてゆく雰囲気が抑えられており、読者が鮮明にイメージをしやすい作品である。ゆつたりとした言葉の運びにも変化があるように感じる。

歌集全体で捉えても、前三歌集のような景の奥深くに降りてゆく雰囲気が、『若夏』『桜雲』では控えられた印象を最初は受けた。しかし、よく読むと直接に描かれていないだけで、風景の向こうにある影山の世界が確かに感じられる。おそらく韻律を優先させていった結果削られる部分が変わり、より洗練された世界が現れてきているのだろう。『若夏』と『桜

『雲』は、流麗さと影山の美的世界両方を高度に兼ね備えた歌集である。そのように思うようになった。

*

先にも触れたが、影山一男が二十九歳の冬に、御父君が五十四歳で逝去されている。影山が四十二歳の春には、御母君が六十一歳で逝去された。

『若夏』『桜雲』のころの影山は、お亡くなりになったご両親と自分の年齢を重ね合わせて、みずからの存在を深く思つたに違いない。

桜の木はやもみぢせる一葉あり生き急ぐな
よ日はまだ長い 『若夏』

若死にの父の行年近づきてあと幾千の夜を
眠らむ

寿命とは（寿）なるか五十四で父逝き六十
一で母亡し
父逝きし五十四歳近づける一日の寒さ猫と
遊ぶ 『桜雲』

盆に死者かへり来るならちちははよわれ抱
きしめて頭を撫でよ

桜花照れば思へりなきがらの母と乗りたる
黒き車を

一人にて仕事をこなし十二年支へくれたる
幾人も死者

母も義父も叔父も逝きにし桜時ことしのさ
くらまだ散らずあり

ここに挙げたのは『若夏』と『桜雲』の死が題材の歌である。桜の季節に母と義父と叔父を亡くし、祖母も春に亡くしている。桜は影山にとって死を思わせる花であろう。

哀しくも美しい影山短歌の桜の歌。思索・衝動・回想など内的な面に表現の根を持つていような死を思う歌。そんな歌を交互に表現する歌人影山の力に感嘆するのである。

*

影山一男は「コスモス二〇〇八年二月号」シリーズ・作歌わたしの方法」の中でこう書く。

さて現在だが、これは昨年出版した第四歌集『若夏』を読んで下さった方はわかっていると思う。私の目指す歌は依然として、日常を素材とした抽象である。抽象というよりは「美」といった方が正確かもしれない。（中略）私が心掛けている事のもう一つは韻律の重要さである。（中略）抽象美と現実感そして韻律の素晴らしい歌、これが私の目標である。

影山は『若夏』『桜雲』で美を、日常の生活の中に見出し、時に再構成し表現する。美しい韻律の奥に湛えられた感情は深い。美意識のもと、日常べつたりの歌は少ない。しかし、影山が麻布霞町を思うとき、あるいは年齢や死を思うときに視線が内向きに変化し、歌に私の部分が濃く表出する。

わたしは冒頭に、言葉が気持ちに追いつかないと思うことがあると述べたが、日常をそのまま詰め込んで表現するのではなく、『若夏』『桜雲』の表現のように、抽象美と現実感と韻律を大切にしたい。